長谷川慶太郎著「日本経済は盤石である」PHP 研究所 2015 年 10 月 2 日刊を読む

## デフレ下の研究開発がイノベーションを生む

１．最後に、重要な点を指摘しておきたい。
　世界全体の経済の流れを俯瞰(ふかん)して､少なくとも今世紀いっぱいはデフレが続くことが予想される。デフレが続く最大の理由は、端的に言うと、世界的規模の戦争がないからである。戦争が起こらなければ、モノは減らない。つまり、モノがだぶつく。モノがだぶついてインフレになることはあり得ない。

２．そのシンボリックな現象が、最近の「逆・石油ショック」である。天然ガスがだぶつくことで、原油価格が大きく下落している。こうしたデフレ現象はこれからも各分野で見られるだろう。

３．デフレという現象は、モノの値段が下がることである。企業側は、価格下落に対して何かしらの手を打たなければ利益は減る一方だ。

４．企業経営者は生き延びるために、必死に新製品の開発を行い、魅力的な製品や商品で顧客を惹(ひ)きつけなければならない。こうした努力の先に、新たな技術が生まれるのだ。

５．あまり指摘されないことだが、人類はこれまでに大規模なデフレを二度経験している。1929 年のウォール街大暴落に端を発した「世界大恐慌」と、1873 年から 1896 年にかけて欧米諸国を見舞った「大不況」である。とりわけ、この「大不況」により 24 年間で世界の物価水準はなんと半分にまで下がった。

６．その一方で、デフレ期に大きな技術革新が進められていく。その代表が「電力」である。

７．最初に電力会社をつくったのはエジソンである。白熱電球の実用化に成功したエジソンは、1882 年、マンハッタンに発電所を設立し、電力の配電および販売を始めた。

８．さらに、株式相場表示機や蓄音機など、電力に関わるさまざまな製品を特許化した。それらの特許を具体的な製品にするためにエジソン・ゼネラル・エレクトリック会社(現・GE)を設立したのである。これらはまさに 19 世紀のデフレ時代と軌を一にする。

９．こうしてデフレ時代に、電力が産業となり、電化製品の大きなイノベーションが生まれた。前述したが、エジソンが電灯を発明して間もない 1886(明治 19)年には、日本の大阪紡績(現・東洋紡)がいちはやく電灯を取り入れて、同社が 1883(明治 16)年から石油ランプを使って実施していた昼夜二交代制による紡績の生産を大きく効率化した。これにより日本の紡績業は国際競争力を発揮し、

1894（明治 27）年の日清戦争時に綿糸、日露戦争時には綿布の輸出超過に成功した。一躍、日本は世界の工業国の仲間入りを果たしたのである。

10. 現在のデフレ下においても、日本企業は熱心に研究開発投資を続けており、あらゆるイノベーションによって利益を高めている。デフレ基調の世界経済の大きな枠組みのなかで、着実に技術開発を続ける日本企業の未来は絶対的に明るく、「日本の大繁栄」は揺るがないと言えよう。

11. 中国のバブル崩壊やギリシャ問題もあるが、日本にはしっかりした内需と中国市場の代替となる他の市場もある。これから日本が国際社会における絶大な信用と技術力とソフトパワーを活かして、世界の主役になる時代がやってくるのだ。

12. 日本経済は盤石（ばんじゃく）である。

［コメント］

ドイツのフォルクスワーゲンのリコール問題で、米国と日本のデフレ下の世界経済における役割が更に増した。デフレで最も大切なのはイノベーション、その担い手である企業家だ。そのことを長谷川慶太郎先生の本書は再確認させてくれる。

― 2015 年 9 月 25 日　林　明夫記―